

1818年版『フランケンシュタイン』
執筆に至る作者の伝記的背景

細 川 美 苗

松 山 大 学
言語文化研究 第40巻第2号 (抜刷)
2021年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 40 No. 2 March 2021

1818年版『フランケンシュタイン』 執筆に至る作者の伝記的背景

細 川 美 苗

1818年に出版された『フランケンシュタイン』(*Frankenstein; or the Modern Prometheus* 1818) 初版は、1816年に当時ほんの18歳だったメアリ・シェリー(Mary Shelley 1797-1851 当時は旧姓メアリ・ゴドウィン Mary Godwin 以降メアリ) がレマン湖湖畔で着想を得たものであることはよく知られている。ディオダーティ荘(The Villa Diodati)を借りてスイスに滞在していたイギリス人貴族ジョージ・ゴードン・バイロン(George Gordon Byron, 6th Baron Byron, 1788-1824 以降バイロン)を、メアリがのちに夫となるパーシー・シェリー(Percy Bysshe Shelley 1792-1822)らと共に訪ね、怪奇譚創作を競うことになったのが発端である。メアリが『フランケンシュタイン』の着想を得た晩に、バイロンの主治医であるジョン・ポリドリ(John William Polidori, M.D. 1795-1821)は、後に『ヴァンパイア』(*The Vampyre* 1819)となる物語を執筆している。『ヴァンパイア』はブラム・ストーカー(Bram Stoker 1847-1912)の『ドラキュラ』(*Dracula* 1897)に影響を与えることになる。

本論ではメアリが誕生以来置かれていた状況を顧みて、彼女が16歳で既婚者と大陸旅行へ出かけるに至る伝記的背景を示す。そうすることで、社会規範を逸脱した人物たちの中で形成される特異な人間関係が、1818年版『フランケンシュタイン』の着想を生む過程を跡付けたい。

幼 少 時 代

メアリは1797年8月30日に女権論者として知られていたメアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797 以降ウルストンクラフト) の次女として誕生した。父親は急進主義思想家のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin 1756-1836 以降ゴドウィン) であった。ウルストンクラフトの長女ファニー (フランシス) (Frances Imley 1794-1816 以降ファニー) の父親はアメリカ人ビジネスマンのギルバート・イムレイ (Gilbert Imley 1754-1828 以降イムレイ) であり、異父姉である。メアリを出産して間もなく、ウルストンクラフトは産褥熱で亡くなり、ゴドウィンは生まれたばかりのメアリと当時3歳のファニーを一人で育てることとなる。ゴドウィンはファニーを実子として育て、12歳ごろに真実を伝えたのではないかと考えられている。この点についてウィリアム・セントクレア (William St. Clair) は、1806年2月8日にゴドウィンはファニーに事実を告げたのではないかと推測している (St. Clair 537)。

ウルストンクラフトの死に際して、ゴドウィンは彼女の負債の返還を求められた。そこで彼は出版業者のジョセフ・ジョンソン (Joseph Johnson 1738-1809) と取引をし、ウルストンクラフトの残した書き物と彼女の伝記の著作権と引き換えに、彼女の借金を肩代わりしてもらった。ゴドウィンは二か月ほどで *Posthumous Works of the Author of a Vindication of the Rights of Woman* と *Memoir of the Author of a Vindication of the Rights of Woman* を書き上げた。タイトルにウルストンクラフトの名をあげるまでもなく、「『女性の権利の擁護』 (A Vindication of the Rights of Woman 1792) の作者」と示せば読者に理解されたのだから、ウルストンクラフトが当時かなり有名であったことがうかがえる。

ゴドウィンにより死後出版された上記二冊の著作は、彼女の人生について隠すことなく暴露したものであり、ファニーの父親であるイムレイとウルストン

クラフトの関係についても率直に描写していた。これらの出版物を残された娘たちは自由に手に取ることができたのだから、ファニーは自分の出自については早い段階から気が付いていたであろう。ウルストンクラフトの自殺未遂を含む奔放な生き様について率直に描写したことは、ゴドウィンの子供とは反対に、読者から非難され、亡き妻の尊厳を貶めたとみなされた。ゴドウィンがウルストンクラフトの未完の書き物や手紙、伝記を出版したことに対する世の中の反応について、セントクレアは以下のように指摘している。

‘Shameless’ was the most charitable description ; ‘lascivious’ and ‘disgusting’ were more common. Godwin, it was frequently noted, had flaunted his dead wife’s immortality. His careful, loving, and sympathetic passages of descriptions were coarsely summarized in the uncompromising language of sneer, innuendo, and moral indignation. Even Godwin’s former friends on the *New Annual Register* felt obliged to condemn. (St. Clair 185)

「恥知らず」であるというのが最も寛大な表現だった。「猥褻だ」とか「吐き気がする」というのがより一般的な反応であった。しばしば言われたことだが、ゴドウィンは亡くなった妻の名誉を汚したのだ。彼の細心の、愛情に満ち、思いやりのある表現は、妥協のない愚弄やあてこすり、道徳に関わる怒りの言葉へとがさつにまとめられたのである。「ニュー・アナレティカル・レジスター」紙に関わるゴドウィンの友人たちでさえ、彼を糾弾しなければならないと感じたほどである。

翌1798年にゴドウィンは修正を施した第2版の出版をしていることから（St. Clair 185）、ウルストンクラフトの伝記への批判がかなり大きかったことが分かる。思いがけず熾烈な非難の的となったゴドウィンは、かなり動揺したのだろう。

1801年12月にゴドウィンにはメアリ・ジェイン・クレアモント (Mary Jane Clairmont 1766? -1841 以降メアリ・ジェイン) と再婚する。メアリ・ジェインにはクララ・メアリ・ジェイン・クレアモント (Clara Mary Jane Clairmont 1798-1879 以降クレア) という連れ子がおり、メアリより一歳ほど年下であった。クレアは少女時代にはジェイン・クレアモントと呼ばれていたが、1814年秋ごろからはクレア・クレアモント (Claire Clairmont) と名乗り始める (Seymour, 46)。

少女時代

ゴドウィンの再婚に伴い始まった複雑な血縁関係にある (または、血縁関係のない) 家庭生活は、思春期のメアリには困難なものであったと想像できる。

セントクレアやミランダ・シーモア (Miranda Seymour) によると、メアリの継母となったメアリ・ジェインは他愛のない嘘をつく癖があり、ゴドウィンの友人に嫌悪されていた。この点について、シーモアは以下のように指摘している。

Godwin had hidden his courtship from his friends ; perhaps he sensed that they would disapprove. Tactless, gossip-loving and habitually unfaithful, Mary Jane struck most of them as a poor substitute for Mary Wollstonecraft. . . . Eliza [Fenwick] disliked Mary Jane for making trouble ; [Charles] Lamb hated the woman who had robbed his friend of dignity. . . . Mary Lamb shared his views, telling Hazlitt's wife on one occasion that Mrs. Godwin reminded of her of the spiteful sister in the fairy story, 'Toads and Diamonds'. (Seymour, 46-47)

ゴドウィンはメアリ・ジェインとの付き合いを友人には隠していた。おそ

らく友人たちが良く思わないことを感じていたのだろう。無神経で噂話を好み責任感の欠けるメアリ・ジェインは、お粗末なメアリ・ウルストンクラフトの代わりとして、多くのゴドウィンの友人に衝撃を与えた。イライザ〔・フェンウィック〕は、メアリ・ジェインが問題を引き起こすので嫌っていた。〔チャールズ・〕ラムは友人の威厳を損ねたとして彼女を嫌悪していた。メアリ・ラムも夫と同じ意見であり、ある時ハズリット夫人に対してゴドウィン夫人はおとぎ話「ヒキガエルとダイヤモンド」に出てくる意地悪な姉を思い起こさせると話した。

ゴドウィンが平凡な女性と再婚した事を、友人達は良く思わなかったようだが、メアリ・ジェインは良い妻であり、ゴドウィンとの夫婦仲は良好であった。シーモアはメアリ・ジェインの肯定的な側面について記すことも忘れていない。

Mary Jane was a troublemaker and a liar; she was not a fool. A skilled translator (her version of *The Swiss Family Robinson* was for many years the standard text), she was knowledgeable, amusing and well-read. . . . We have a glimpse of her as a good housekeeper and affectionate wife. (Seymour 47)

メアリ・ジェインは厄介者で嘘つきだったが愚かではなかった。腕のいい翻訳家で（彼女が翻訳した『スイスのロビンソン一家』は長い間基準テキストであった）、知識があり愉快で読書家であった。…私たちは立派な主婦で愛情深い妻の姿をうかがい知ることができる。

『女性の権利の擁護』の著者として有名であったゴドウィンの最初の妻ウルストンクラフトと比較すると、メアリ・ジェインはゴドウィンの友人たちにとっては凡庸な俗物に思えたので、彼女との生活を楽しんでいるゴドウィンの様子

がますます彼らの嫌悪感を増長させたのだろう。

ゴドウィンの再婚によって、メアリの生活に新たな兄と妹が加わることになった。セントクレアの研究によると、合流した二世帯の子供の中で最年長のファニーは温厚な性格で誰からも好かれていたが、父親とも母親とも血が繋がっていないことに自覚的であった。メアリとクレアは年が近く、常にライバル関係にあった。ゴドウィンとメアリ・ジェインが結婚した際、彼女の連れ子であったチャールズ・クレアモント (Charles Clairmont 1795? -1850?) は7歳であった。チャールズには語学の才能が備わっており、早くからフランス語とドイツ語を話し、後にはスペイン語とイタリア語も学んだ。ゴドウィンとメアリ・ジェインの息子ウィリアム・ゴドウィン・ジュニア (William Godwin Junior 1803-1832) は幼いころには落ち着きのない子であったが、後に数学の才能を発揮した (St. Clair 296-298)。

メアリがもう少して10歳になるころ、一家はソマーズタウン (Somers Town) を離れてスキナー通り (Skinner Street) 41番へ転居した。母ウルストンクラフトの眠る教会付近ののどかな地域を離れることは、メアリの子供時代に終わりを告げる出来事であったとシーモアは述べている (Seymour 56)。新居の付近には市場があり、殺生される動物の鳴き声が夜な夜な響き渡っていた。そのような少女時代の体験が後に『フランケンシュタイン』の描写に活用されていると、シーモアは以下のように指摘している。

An uglier sound was the nightly screaming of animals being slaughtered in candlelit abattoirs under Smithfield. It is easy to imagine how horrified an impressionable child like Mary must have been as she learned to connect the sounds of the night to the bloody carcasses hanging outside the double row of butcher's shops in their nearest shopping street, the old Fleet market. Is this where we should look for the nightmarish image in *Frankenstein* of Victor torturing 'the living animal' as he gathered body parts from which to assemble

his creature? (Seymour 57)

さらに物騒な物音はスミスフィールドにある食肉処理場のほの暗い蠟燭の光のもとで屠殺される動物が夜ごとにあげる鳴き声であった。最寄りの買い物場所であるオールド・フリート・マーケットの両脇に並んだ肉屋の外に吊り下げられた血だらけの死骸と夜ごと聞こえる鳴き声との関係を知ったメアリのような感受性の強い少女が、どれほどの恐怖を感じたかを想像するのはたやすいことだ。ここにこそ我々は、『フランケンシュタイン』においてヴィクターが彼の生き物を再構築するための肉体の部分をかき集めるために、「生きた動物」を苦しめたという悪夢のようなイメージの源を探し求めるべきであろうか。

転居は金銭的に困窮していたゴドウィン一家が子供たちと暮らしてゆくために十分な広さのある住処を求めた結果であるが、子供にとっては恐ろしく物騒な場所への移動であったことは間違いないだろう。母を亡くし、複雑な人間関係の中に置かれた少女が、毎夜聞こえる屠殺される動物たちの声に恐怖を覚える経験が、『フランケンシュタイン』に漂う暗く不気味な雰囲気を形成しているというシーモアの指摘は説得力があるといえる。当時のホルボーン (Holborn) には牢獄があり、本屋と肉屋がひしめき合っていたというのであるから、知識と死体と無法者が交錯する日常の中に、『フランケンシュタイン』へと連なる発想の萌芽が育まれたといえる (Seymour 56)。

自宅周辺に屠殺場があることから、夏場には付近の衛生状態がひどく悪化した。そのため、ゴドウィン家の子供たちは病気に感染することを恐れて、暑い季節にはラムズゲイト (Ramsgate) へ避難していた。それでもマリアの体調は思わしくなく、1812年から1814年にかけては、大部分の時間をスコットランドで過ごすようになっていた (Seymour 60)。このようなマリアの体調悪化について、シーモアは継母との人間関係が原因なのではないかと推測している。

Mary's condition did not improve after her six-month stay in Ramsgate, where she was isolated and unhappy boarding-school lodger. It [eczema] had vanished by the time she returned in 1814 from two long stays in Scotland, where she lived in an affectionate, uncritical household. It is difficult not to construe the illness as psychosomatic, particularly when we know that her father also suffered acutely from eczema in times of stress. Conjectures have to be made in the absence of letters, but it seems clear that the move to Skinner Street marked the beginning of what Mary called 'my girlish troubles' and that these manifested themselves in a physical condition. The phase comes from a letter Mary wrote in her twenties. 'And I am threatened with a return of my girlish troubles,' she confided to a friend. 'If I go back to my father's house — I know the person I have to deal with ; all at first will be velvet — then thorns will come up — ' The person in question was, of course, her stepmother. (Seymour 61)

六か月の間ラムズゲイトで孤独でみじめな寄宿学校生活を過ごした後も、メアリの健康状態は回復しなかった。それ [湿疹] は二度のスコットランド長期滞在を終えて、1814年にメアリがロンドンへ戻ってきたころには消えていた。スコットランドでメアリは愛情に満ち、他人をあれこれ批判することのない家庭で過ごしたのだ。その症状の原因を精神的なものではないと考えることは非常にむづかしい。なぜなら、彼女の父親もストレスにさらされた状況に置かれると、ひどい湿疹に悩まされたことが分かっているからである。手紙が残されていないので推測をしなければならないが、スキナー通りへ戻ったことが、メアリが「子供じみた問題」と呼ぶものが始まった時期であり、それらが身体的な状況として表面化したことは明らかである。20代のころにメアリ [・シェリー (19歳でパーシー・シェリーと結婚し、シェリー姓へ)] が書いた手紙で彼女は友人に以下のよう

に打ち明けている。「それで私は例の子供じみた問題が再発すること恐れたの。もし私が父の家へ戻ったとしたら、自分が誰の相手をしないとイケないかは分かっていました。最初はとても優しく振舞うでしょう。でも次第にトゲが出てくるはずですよ。」ここで言及されているのは、もちろんメアリの継母のことです。

当時父親のゴドウィンが経済的に非常に切迫した状態に置かれており、メアリが望むほど十分な愛情を示す精神的な余裕はなかったのであろう。メアリの気難しさは、父親が与えなかった承認を求めるしぐさであるとシーモアは指摘している (Seymour 62)。家庭内で継母メアリ・ジェインとの緊張関係を作り出す思春期のメアリに手を焼いた父親は、彼女を寄宿学校へ送ることで問題の一時的な解決を図ろうとした。シーモアによれば、月に一度だけ手紙をよこす無関心な父親の態度に、メアリは大いに傷ついていた (Seymour 64)。以下は、借金返済のため借金を繰り返す状態に置かれていたゴドウィンの当時の苦悶を示すセントクレアの指摘である。

By the autumn of 1810 he was near to despair.

Death was much on his mind. So was the fame — or oblivion — which death brings. From childhood he had longed for fame and he had achieved his ambition. But now he was not even infamous: he was forgotten. (St. Clair 306)

1810年の秋ごろには、ゴドウィンは絶望の状態だった。

死が彼の大きく心にのしかかっていた。また彼の名声もまた同様の状態であった。死んでしまった。あるいは忘却された状態であり、忘却とは死がもたらすものである。ゴドウィンは子供のころから名声を得ることを希求しており、その念願を達成した。しかし、今では彼は破廉恥な人物です

らなく忘れ去られたのだ。

経済的な困窮に加えて、世間から忘れ去られた作家としてのゴドウィンの内心は非常に苦しいものであった。一方で、深刻な孤独感を覚えるメアりに愛情を示していれば、後の彼女の駆け落ちを防ぐことができたかもしれない。しかし、メアリが既婚者との駆け落ちという19世紀初頭の社会規範を逸脱する行為に踏み出さなかったなら、『フランケンシュタイン』は執筆されてなかっただろう。

一家が苦境に置かれていた1812年1月、サセックスの准男爵家の跡継ぎであるパーシー・シェリー (Percy Bysshe Shelley) がゴドウィンへ手紙を送った。裕福な貴族からの金銭的な援助を期待したゴドウィンは返事をしたため、10月にパーシー・シェリーはゴドウィンの自宅を訪問した。

パーシー・シェリー

ゴドウィンに手紙を送った時、パーシー・シェリーは19歳だった。彼はサセックスの地主の息子で、無神論に関するパンフレットを公にしたため、オックスフォード大学から放校処分を受けていた。ゴドウィンに手紙を書く前年の1811年8月、16歳のハリエット・ウエストブルック (Harriet Westbrook 1795-1816 以下ハリエット) と駆け落ち結婚していた。ハリエットはパーシー・シェリーの妹の学友だった。彼女の父親はコーヒーハウスや宿屋を経営し裕福であったが、身分違いの結婚にパーシー・シェリーの父親は激怒した (Seymour 67)。

率直であることを美德と考えたパーシー・シェリーは、ゴドウィンが存命であったことに驚きかつ喜び、その気持ちを賛辞のつもりでゴドウィン宛の手紙に書いた。無政府主義思想を掲げて、フランス革命期には大きな社会的影響力を持ったゴドウィンであったが、自身がすでに世間から忘れ去られた存在で

あることを自覚していた。そんな中で受け取ったやや無神経なシェリーの賛辞は、彼を複雑な気持ちにさせたことだろう (St. Clair 316)。10 か月間にわたる手紙のやり取りを経て、二人の思想家は対面した。当時の二人の様子について、セント・クレアは以下のように綴っている。

They had a lot to talk about, religion, philosophy, politics, psychology, literature, women, money — everything of concern to the New Philosophy. At the first meeting they discussed ‘matter and spirit’ and ‘atheism’; at the second ‘utility and truth’ and ‘party’. They then moves on to questions of Church government, the stewardship. For the first time for fifteen years, Godwin took notes of his chief conversation. Shelley, it was already clear, was the best pupil he had ever had. (St. Clair 336)

二人には話すべきことがたくさんあった。宗教、哲学、政治、心理学、文学、女性、倫理…新時代の哲学に関することならなんでも。最初の面会で彼らは「物質と霊魂」そして「無政府主義」について議論した。2回目には「有用性と真実」と「党派」。それから二人は教会政治、財産管理について話し合った。15年間で初めてゴドウィンが主な会話の内容を書き留めた。パーシー・シェリーが教え子の中でも最も聡明であることは、すでに明白であった。

最初のうちは知的な交流を大いに楽しんだ二人だったが、パーシー・シェリーと妻のハリエットは徐々にゴドウィン宅への訪問を楽しめないと感じ始めた。ゴドウィンは若い二人から敬われることを要求したし、気まぐれでしばしば面会の約束を破るパーシー・シェリーにメアリ・ジェインはうんざりしていた。ハリエットは小言の多いメアリ・ジェインを疎ましく思い、しばらくするとゴドウィン宅に同行することを拒むようになった (St. Clair 337)。

シェリーは奇妙な若者で、身体的な脆弱さを強い感受性の証と信じ、自分が病弱であることを誇りに感じていた。彼は何日もポケットに入れたパンくずだけで過ごし、アヘンを主成分とする薬で腹痛を紛らわせていた。加えて一日に数回は冷水に頭をつけそのまま放置して乾燥させたため、しょっちゅう風邪をひき咳込んでいた。そのうえ若い夫婦は死や自殺について語り合うのを好み、突然死にたくなかった時のために毒を持ち歩いていた (St. Clair 337-38)。すでに57歳であったゴドウィンも、このようなシェリーの奇行に大層あきれた。

メアリがスコットランドからロンドンに戻った翌日、1812年11月11日、パーシー・シェリー一家はスキナー通りのゴドウィン宅で食事をした。この時がメアリとパーシー・シェリーの初対面だと推測する者もあるが、面会に関する記述が存在していないことを理由に、シーモアはその可能性を否定している (Seymour 81)。セントクレアも、1812年11月においてはパーシー・シェリーがメアリを見た可能性があるにすぎないと指摘している (St. Clair 357)。スコットランドからの長い船旅による疲労で、メアリは会食に同席しなかったとシーモアは推測している。

その会食の二日後、パーシー・シェリー一家はウェールズへ旅立った。約半年後の1813年4月に一家はロンドンに戻ったものの、ゴドウィンとは面会しなかった。ゴドウィンは経済的な援助を受ける約束があったことから、パーシー・シェリーがロンドンを離れている間に、彼が将来相続する財産を担保にしてお金を工面できるように奔走していたのだった。ゴドウィンは、6月8日にパーシー・シェリーをロンドンで見つけたが、そのころにはメアリはすでにスコットランドへ戻っていたので、メアリとパーシー・シェリーはこの時期には面会していない。ゴドウィンはパーシー・シェリーに長期間にわたる音信不通の理由を問うたところ、彼は妻のハリエットがゴドウィン夫人に面会することに耐えられなかったのだと説明した (“When Godwin eventually tracked him down on 8th June, Shelley explained frankly that the reason he had not made contact was that Harriet could not bear to visit Mrs Godwin, an understandable

explanation.” (St. Clair 351))。紆余曲折を経て、11月には両家の交流が再開された。

駆け落ち

ゴドウィン奔走により新たな借り入れをすることができたパーシー・シェリーだったが、恩人に報いることはなかった。得た金の半分をゴドウィンの経営する書店のために融通し、残りは自分の手元に残すと決めたのだ。ゴドウィンは大いに落胆し、裏切られたと感じた (St. Clair 355)。しかし、パーシー・シェリーはゴドウィンの失意にさらなる追い打ちをかける。彼はまだ16歳のゴドウィンの娘メアリと共にスイスへ発つ許可を求めたのである。1814年7月6日のことである (St. Clair 359)。

Godwin was bitterly disappointed... But worse was to follow. In the evening after dinner when Godwin took Shelley on a walk in Spa Fields, Shelley explained that he had fallen in love with Mary Godwin — who was then just short of her seventeenth birthday — and that he intended to end his marriage with Harriet and live with Mary. They proposed to leave England and settle in Switzerland. The money from the bond was needed to pay the costs of the travel and other expenses. Shelley asked Godwin’s approval for these proposals. (St. Clair 355)

ゴドウィンはひどく絶望した。…しかし、さらに悪いことが続いた。ゴドウィンが食後にパーシー・シェリーと連れ立ってスパ・フィールドへ散歩に出かけた際、パーシー・シェリーはもう少して17歳になるメアリと自分が恋愛関係にあり、ハリエットの結婚に終止符を打ちメアリと共に暮らすつもりだとゴドウィンに告げた。二人はイギリスを離れ、スイスで暮

らすと申し出た。債務証書から得た金はこれにかかる旅費などの支払いに充てるといのである。これらの提案に同意するようにとパーシー・シェリーはゴドウィンに求めた。

この提案にゴドウィンは驚いた。なぜならメアリはスコットランド療養から戻ったばかりだったからだ。1812年10月にパーシー・シェリーはメアリを見たかもしれないが、二人が知り合ったのはほんの二か月前、1814年5月のことであった。しかしその一方で、借り入れに関する交渉が行われていた6月の後半には、パーシー・シェリーはほとんど毎日ゴドウィンの自宅で食事をとっていたのである。また、この提案はゴドウィンを窮地に陥れもした。パーシー・シェリーの提案はゴドウィンの著書『政治的正義』(*Enquiry Concerning Political Justice and its Influence on Morals and Happiness*, 1793)の初版に記された思想と矛盾するものではなかったし、彼から金銭的援助を受けている以上、彼と断交することもかなわない状況であった。

ゴドウィンはそのような計画を認めることはできないとパーシー・シェリーを諭し、メアリ、クレアとチャールズらとも話し合った。若者たちはゴドウィンの意見を聞き入れ、メアリとパーシー・シェリーは彼らの移住計画をあきらめることに同意した。ゴドウィンはパーシー・シェリーに手紙を書き、今後は自宅を訪問しないように言い渡し、以降二人は金銭的な打ち合わせのために外で面会することとした。

だが、この約束は守られず、パーシー・シェリーはゴドウィンの留守中にメア리를訪問した。また、クレアが手紙を仲介し、しばしばメアリとパーシー・シェリー、クレアの三人はウルストンクラフトの墓があるセント・パンクラス教会墓地で落ち合い、パーシー・シェリーとメアリは逢瀬を重ねていたのである。7月25日にゴドウィンはパーシー・シェリーが約束を守らなかったことを責める手紙を書いている。

7月28日の早朝、メアリとクレアは自宅を抜け出し、貸し馬車で迎えに来

たパーシー・シェリーと共にドーヴァー海峡へ向かった。メアリ・ジェインがすぐに三人を追い家へ戻るように説得したが失敗し、若者たちはそのままパリへと旅立った。

パリからスイスへ向かった一行は、資金が足りなくなる限界であるスイスのルツェルンで引き返して、ライン川沿いに帰郷を始めた。その途にあるゲルンスハイム辺りでは、ライン川からフランケンシュタイン城を眺めることが可能であり、その地にかつて住んでいた錬金術を学んだ医師であるコンラッド・ディッペル（Konrad Dippel 1673-1734）に関する伝説を三人が耳にした可能性をシーモアは指摘し、『フランケンシュタイン』の構想を形作る体験のひとつであると指摘している（Seymour 110）。

A pastor's son, Dippel was born at the castle Frankenstein, when it was being used as a military hospital. After studying alchemy at university, he became a fashionable physician whose dream was always to buy and live in his birthplace. (He liked to sign himself as Dippel Frankenstein, Dippel of Frankenstein) Chased out of Strasbourg after allegations that he had been robbing graveyards for his anatomical experiments, Dippel was convinced that he could bring a body back to life by injecting it with a concoction of blood and bone, often made from both mammal and human corpses. (Seymour 110)

牧師の息子であるディッペルは、当時陸軍病院であったフランケンシュタイン城で生まれた。大学で錬金術を研究し、有名な医師となった彼は、いつもフランケンシュタイン城を購入してそこに住む事を目標としていた。（彼はディッペル・フランケンシュタイン、フランケンシュタインのディッペルと署名することを好んだ。）解剖実験のため墓泥棒を働いた罪で彼はストラズブルを追われたが、主に哺乳類と人間から得られる血と骨の調合物を注射することにより、死体を蘇らせることができるとディッペルは

確信していた。

確かに『フランケンシュタイン』において、主人公のフランケンシュタインは生き物を創造するための材料を求めて、墓場や屠殺場をうろついている。

One secret which I alone possessed was the hope to which I had dedicated myself; and the moon gazed on my midnight labours, while, with unrelaxed and breathless eagerness, I pursued nature to her hiding places. Who shall conceive the horrors of my secret toil, as I dabbled among the unhallowed damps of the grave, or tortured the living animal to animate the lifeless clay? ... The dissecting room and the slaughter-house furnished many of my materials; and often did my human nature turn with loathing from my occupation, whilst, still urged on by an eagerness which perpetually increased, I brought my work near to a conclusion. (Shelley *Frankenstein* 37-36)

私だけが知っているたった一つの秘密に自身のすべてをささげました。緊張で息もつけないほどの情熱をもって、私が自然をその隠れ家まで追いかけてゆくさまを、真夜中の月がじっと見つめていました。じめじめした穢れた墓の泥をかき分けたり、生氣のない土くれを蘇らせるために動物を生きのまま拷問にかけたりしている時の、誰にも言えない私の苦役の恐ろしさを理解できるものはあるだろうか。…解剖室や屠殺場が必要な材料の多くを供給してくれました。自分にのこる人間らしさから、自分の仕事に嫌気がさし顔をそむけることもしばしばありましたが、それでも膨れ上がる情熱に後押しされ、実験はもう少しで完成するところまでたどり着きました。

実際に小説に描かれている場面と照らし合わせてみても、シーモアの指摘には説得力があるといえるだろう。

オランダまで戻ってきた一行は、悪天候に阻まれしばらくその地に足止めされた。そのころメアリは妊娠初期の状態であった。三人は文無しで、マーススライス（Maassluis）からイギリスへ渡る船賃も手元になかった。到着後に渡し賃を支払う約束で、一行は何とか帰郷した。ロンドン到着後、船賃を清算するためにシェリーは友人を訪ね金の無心をしなければならなかった。驚くことに、彼はロンドンに置き去った妻ハリエットの実家にまで押し掛けた。メアリにとってはこれから日常となる、金策に駆けずり回る生活の始まりである（Seymour 113）。

新 生 活

娘たちは家に戻ってくるとゴドウィンは考えていたが、間違っていた。メアリもクレアもゴドウィンの家に戻るつもりはなかった。身重の妻を見捨てたパーシー・シェリーの行動は世間から厳しい非難を受け、彼と連れ立って大陸へ渡ったゴドウィンの娘たちも軽蔑されていた。このような状況においてもパーシー・シェリーからの金銭的援助に頼らざるを得ないゴドウィンは、娘たちの出奔に同意していたとみなされることを回避するために、娘たちに厳しい態度をとらざるを得なかった。メアリは家へ近づくことを禁止された。クレアは、彼女の母親によれば、「通訳が必要であったために、自己中心的で思いやりのない若いカップルに誘拐された罪のない犠牲者」（“innocent victim, abducted by a selfish and heartless couple in need of an interpreter”（Seymour 114））なのだとして解釈され、時折ゴドウィン宅を訪れることを許された。そうすることで、彼女はメアリと実家の橋渡しを務めた。

1814年11月、パーシー・シェリーの妻ハリエットは息子を出産した。彼女は実家に戻っており、パーシー・シェリーとの関係は修復できない状態であったが、生まれた子は正式なシェリーの遺産相続人であった。シェリーは息子の誕生を喜び、その様をメアリは苛立ちながら眺めていた。また、家に帰ること

もできるクレアがメアリらと同居を続け、パーシー・シェリーの気を引こうと奮闘する様子もメア리를悩ませた。クレアは怪談にひどく怯え、ひきつけを起こしたりしてパーシー・シェリーを誘惑していた。メアリの日誌に綴られたクレアに対する嫌悪感や苛立ちに関して、この時期にクレアとパーシー・シェリーの関係が性的なものになった可能性を排除することはできないとシーモアは指摘している (Seymour 120-121)。このころクレアはクララ (Clara) と名乗り始め、後にクレア (Clare, Claire) と自称し、クレア・クレアモントという今日彼女が知られている名を名乗るようになる³⁾。

1815年、年が明けてすぐにパーシー・シェリーの祖父が亡くなった。パーシー・シェリーは将来手に入れる遺産の権利の一部を父親に売り、自身の経済状況をいくらか立て直した。それでも、肉食主義を実践していたせいか、メアリとパーシー・シェリーの健康状態は思わしくなく、4月後半に出産予定だったメアリは2月22日に未熟児を出産した。医師は赤子が生き延びる希望は少ないと告げた。3月2日、メアリ、パーシー・シェリー、生まれたばかりの女児とクレアはロンドンのアラベラ・ロウ (Arabella Row) へ引っ越した。親しく交流のあった数少ない友人の一人であるトマス・ホッグ (Thomas Hogg 1792-1862) を交えて、「社会の慣習の不条理を打破するために」(“to defeat the absurdity of social conventions” (Seymour 129)) 共同生活を営む計画であった。

その4日後の3月6日に赤子は亡くなった。メアリはひどく悲しみ、子を失ったことが頭から離れず、13日の日誌に以下のように書き込んでいる。

think of my little dead baby — this is foolish I suppose yet whenever I am left alone to my own thoughts & do not read to divert them they always come back to the same point — that I was a mother & am so no longer . . . (Shelley *The Journals of Mary Shelley* 69)

私の死んでしまった小さな赤ん坊について考える — ばかげていると思うけ

れど、一人ぼっちで考え事をしてしていると、読書をして気をそらさないでいるときには、いつも同じことが頭に浮かんでくる—つまり、私は母親であったが、もはやそうではないということ。

3月19日に再び赤ん坊についての書き込みがみられる。

Dream that my little baby came to life again — that it had only been cold & that we rubbed it by the fire & it lived — I awake & find no baby — I think about the little thing all day — not in good spirits — Shelley is very unwell . . .
(Shelley *The Journals of Mary Shelley* 70)

私の小さな赤ん坊が生き返る夢を見た。—それは、冷たくなっていただけで、火のそばで赤ん坊をさすって温めたら、それは生きたのだ。—私は目が覚め、そこに赤ん坊はいなかった。—一日中私はその赤ん坊のことを考えていた。—元気がない。—〈パーシー・〉シェリーもとても具合が悪い。

3月20日にも赤ん坊の夢を見たという記述があり、メアリの悲嘆の大きさがうかがえる。また、3月19日の日誌に書かれた夢に見るという言葉通り、亡くなった赤ん坊に息に吹き返してほしいという願望は、命のない肉体に生命を吹き込むという物語の着想へ至るものであるといえるだろう。

この時期、メアリのクレアに対する敵対心が増大する。妊娠、出産に続き赤子の死に直面した時期に、夫の気を引こうとしている義理の妹と同居することは不快であっただろう。メアリの日誌にはクレアに対する苛立ちが綴られているが、特に3月23日には「〈パーシー・〉シェリーはとても美しい青年だが、これほど邪悪であることは残念である」(he [Godiwn] remarked that S. was so beautiful it was a pity he was so wicked) (Shelley *The Journals of Mary Shelley* 72) とゴドウィンが述べたと記しており、この時期にクレアがパーシー・シェ

リーの子を妊娠し、その事実が判明したのではないかとシーモアは推測している (Seymour 131)。この後、5月にクレアはリンマウス (Lynmouth) へ旅立つが、その計画は主にパーシー・シェリーが立てたもので、彼の出費で賄ったことを考えると、メアリの苛立ちを鎮めることよりも、クレアが人目を避けて出産できるように計画されたのではないかという推測も妥当なものであるといえる (Seymour 131-33)。クレアが旅立ってから7月までのメアリの日誌は紛失しており、その間の手紙もほとんど残っていない事実についても、クレアがパーシー・シェリーの子を身ごもっていたとすれば、偶然のことではないとシーモアは重ねて指摘している (Seymour 134)。もし、クレアが1815年初頭に妊娠していたのなら、その年の後半に出産時期を迎えると予想できるが、彼女は1815年の秋には弟チャールズと共にアイルランドを訪れ、1816年初頭には一人でロンドンに戻り、ゴドウィンの家を訪ねたりしている。シーモアが推測するように、クレアがパーシー・シェリーの子を身ごもっていたとしても、子供は誰かに預けられたか、出産には至らなかったのかではないか。

1815年の6月になる前、確かな時期は不明だが、メアリとパーシー・シェリーはデヴォンの南部トーキー (Torquay) へ転居した。その五年後に、パーシー・シェリーの妻となったメアリは、トーキーを舞台とした短い物語、『モリス、あるいは漁夫の小屋』 (*Maurice, or The Fisher's Cot*) をイタリアで執筆する。

トーキーへ移った後の二人の動きは不可思議であるとシーモアは指摘している (Seymour 136)。シーモアによれば、パーシー・シェリーは6月30日、ウェールズ北西部のトレマドック (Tremadoc) に住む旧友のジョン・ウィリアムズ (John Williams) に、翌日にはトーキーを発ちウィンザーで家を探すと知らせている。その4週間後、メアリはブリストル近郊のクリフトン (Clifton) からパーシー・シェリー宛に手紙を書いている。その手紙の宛先はロンドンのマーチモント通りで、二人が長い間離れて暮らしていることに不満を漏らす内容である。この手紙を執筆した当時のメアリは、クレアがパーシー・シェリーに

同行していると疑っていたとシーモアは推測している。シーモアの考えが当たっているならば、パーシー・シェリーが容易く妻ハリエットと離別したことを知っているメアリの不安は、かなり現実味を帯びていただろう。

8月初旬、メアリとパーシー・シェリーは共にウィンザー・グレート・パーク (Windsor Great Park) の東門付近のビショップズゲイト (Bishopsgate) に居を定めた。クレアは同居せず、メアリは幸せな生活を手に入れた。メアリは1826年に出版された人類滅亡に関する未来小説『最後のひとり』(*The Last Man*)において、主人公が最も幸福なひと時を過ごす場所としてウィンザーを理想的に描いている。クレアのいない生活がメアリにとって幸福なものであったことがうかがえる。1816年1月24日に、メアリは男児を出産し、自分の父親にちなんでウィリアムと名付けた。

1816年4月、パーシー・シェリーの祖父の遺産に関する訴訟は、パーシー・シェリーや彼の父親が望んでいたほどの財産に関する自由を二人に認めず、パーシー・シェリーは期待していたほどの経済的余裕を得ることはできなかった。そのため、ゴドウィンに約束していた援助をパーシー・シェリーは融通することができなくなり、両者の関係はひどく悪化した。エディンバラを訪れるためゴドウィンがロンドンを離れた5月2日に、パーシー・シェリー、メアリ、息子のウィリアムそしてクレアの四人はドーヴァーへ向かった。5月3日にシェリーはゴドウィンに宛てた手紙を書いた。メアリの日誌の編者は、訴訟が思うような結果を生まなかったことをゴドウィンに知らせるための手紙だったと考えている (*Shelley The Journals of Mary Shelley* 106)。一方シーモアは、パーシー・シェリーはメアリと共に永遠に英国を去り、ジュネーブに向かうと知らせたのだと述べている (*Seymour* 144-45)。

一行は5月13日にジュネーブに到着し、5月25日に同地に到着したバイロンと交流を深め、ある雨の晩にバイロンが借りたディオダティ荘で共に過ごす中で、メアリは『フランケンシュタイン』の着想を得るのである。

*本論は2018年度松山大学特別研究助成の成果である

注

- 1) 「メアリ」「ジェイン」という名前がメアリと義理の母親、義理の妹の間で複雑に共有されているため、本論では一貫してジェイン・クレアモントをクレアと表記しているが、この時期までは彼女はジェインと呼ばれていた。

Works Cited

- Seymour, Miranda. *Mary Shelley*. London: Picador, 2000.
- Shelley, Mary. *Frankenstein, or the Modern Prometheus*. 1831. *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 1. Eds. Jane Blumberg and Nora Crook. London: Pickering, 1996. 8 vols.
- . *The Journals of Mary Shelley*. Edited by Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1987.
- St. Clair, William. *The Godwins and the Shelleys*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1989.